

▼播種～仮植の管理▼

育苗用土のおすすめは『メトロミックスたねまき用』です。

●容量：約40L ●N量：120mg/L

元肥にマグアンプを使用しており、根毛の発達に有用な赤玉土（細粒）が配合されています。



【管理のポイント！】

播種後、最初の灌水はしっかり行いますがその後は過湿にならないように注意が必要です。

特に子葉展開以降は、用土が十分に乾いていない状態で灌水すると根の伸長が抑制されてしまいます。

セルトレイの用土表面が1/3ほど乾いた頃を目安に、乾いた箇所を中心に軽く灌水を心掛けましょう。
この時、ハス口で水圧をかけるような灌水は行わないように注意します。

▼仮植～定植の管理▼

【仮植の適期】本葉2～3枚頃

側芽の形成は本葉4～5枚目から開始されます。仮植が遅れると根が老化し、活着が遅れる（生育のバラつき）要因になるので注意しましょう。

時期	3月中～下旬 (本葉 3 枚)	4 月	5 月 (本葉 1 5 枚ほど)	6 月 (本葉 1 8 枚ほど)
作業	3 寸ポット仮植	仮植 3 週間後BA処理 (元肥が効いている時期)		5 寸定植
液肥	定植直後からライゾー 3,000倍～5,000倍 3～4回連続で灌注	定植 2 週以降ピータース (20-10-20／15-0-15) 4,000～5,000倍	ピータース (20-10-20／15-0-15) 2,000～3,000倍 少しずつ濃度あげていく	
置肥		葉枚数 8 枚以降から置肥開始 (2～3回) プロミックオキサミドタイプ8-25-8 (小粒) または、マグアンプK (中粒) 0.5g		

生育を逆算！

7月末までに定植鉢で根を張らし、夏でも肥料を吸収できる状態にするためには『いつ仮植すべきか？』検討しましょう！

仮植の用土は、気相率が高いものを使用し余分な水分を含ませないことが重要です。植え付けの際、苗を強く押すと活着ムラの原因となるため軽く土を寄せる程度にしましょう。

用土は十分量を充填し、ウォータースペースは少ない方が生育の揃いが良くなります。

灌水量は控えめ（ポット3/4程度が湿る位）からスタートし、徐々に増やしていきます。仮植から40日経過した頃には上根（うわね）の張り出しが見えることが理想的です。

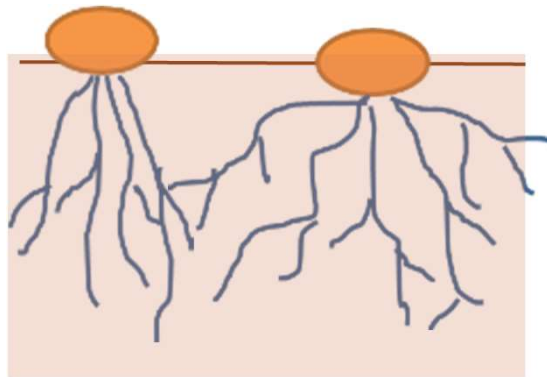
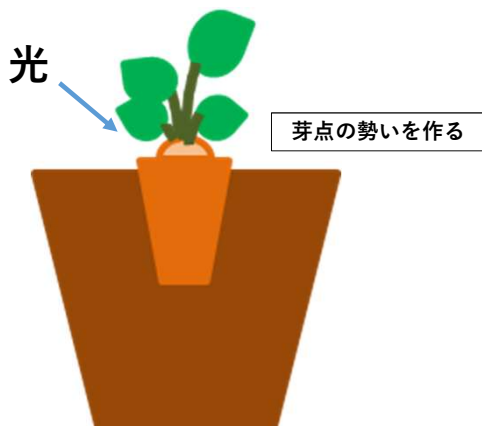
<仮植の用土：参考例>

資材	割合	備考
調整ピートモス	50%	
パーライト（小粒）	20%	排水性（軽石とパーライトでも可）
赤玉土（小粒）	15%	保肥力を確保
腐葉土	15%	
マグアンプK中粒	1～2g/L	初期肥料とリン酸（根の伸長）
重焼燐	1～2g/L	
苦土石灰	1g/L	カルシウム（生長点に作用）

仮植は、塊茎を1/3くらい地上に出して植えつけます。

（塊茎に光が当たることによって芽の勢いを強くします）

露出し過ぎは根が出る部位が少なくなり根量が減少するので注意



【管理のポイント！】

はじめはライゾーの施用から開始し、根の活性を向上させます。仮植4～5週経過した頃から、吸収の早い硝酸態チッソを含むピータース20-10-20を軸に、カルシウム配合のピータース15-0-15を適宜与えることで根と生長点の伸長を促進します。葉枚数8枚以降は置肥を併用し、肥料のレベルを安定化するとスムーズに側芽が作られます。

（8枚未満での置肥は、主芽に養分が集中してしまうので避けましょう）

ここで生育チェック！

展開葉が大きくなる、葉柄が徒長気味、球根が肥大、新葉の展開が遅い・・・など

このような症状が見られる場合、ECの変動が原因かも知れません。肥料の与え方にムラが生じないように心掛けましょう。仮植段階で最も重要なことは『側芽づくり』です。上手に液肥で管理することが側芽づくりのコツです。

定植後の管理

【管理のポイント】

仮植と同様に、液肥を始める前から**ライゾー**を施用すると初期の成育がスムーズになります。夏場の高温期も肥料レベルの維持に努め液肥は継続的に与えます。お勧めの液肥は、カリ高でカルシウムを含む**ユニバーゾル(SW)**や**プロフェッショナルハイポネックス(13-8-25)**です。日中と夜温の寒暖差がはっきりする時期(夜温が20℃を下回る頃)から中心葉(秋葉)の展開スピードが増し、肥料の吸収量も増加するため置肥(**プロミック**)を併用し肥料欠乏に注意しましょう。

植え替えによる環境の変化に加え、強日射のストレスがかかると活着が遅れたり生育のリズムが崩れてしまうことがあります。蒸散量に対する吸水力(根量)の状態を見極めて灌水し、遮光や葉水を適宜行うことでストレスを軽減しましょう。

夏は、最終的な商品性を大きく左右する大切な時期です。

- (1) 根の位置を仕上げる・・・灌水頻度が多くなる時期ですがやりすぎに注意し、上根を充実させ“追い込み”ができる状態を目指します。
- (2) 肥料レベルは維持・・・この時期にあがってくる花芽の基部を太らせることで大きな花を咲かせます。葉色を維持し芽を順次展開させるため、無理のない範囲で光を当て暑さに耐えさせます。

時期	7月・8月	9月	10月	11月
作業	遮光・葉水・リング掛け・矮化剤・BA+GA処理		葉組み・ジベレリン処理	加温・DIF・出荷
液肥	始めにライゾー3～4回施用(液肥は定植2週間後から) ユニバーゾルSW(14-7-21)または、プロハイポ(13-8-25) 3,000～4,000倍		ユニバーゾルSW(14-7-21)またはプロハイポ(13-8-25) 最終2,000～3,000倍まで上げる 花芽が遅れている場合は ピータース(10-30-20、15-30-15)ピンポイント施用	
置肥	プロミックオキサミドタイプ 8-25-8(中粒)または、 マグアンプK(中粒)1～1.5g	プロミック遅効き8-8-8(中粒) または、 プロミック遅効き6-9-9(中粒)	プロミックスタンダード 8-12-10(中粒)または、12-12-12(中粒) 10月中旬以降は2～3週間隔で置肥	

【置肥のタイミング】

鉢土の側面から太い根が5本～7本ほど張り出していたらプロミックの適期です。

(まだ側面から根が十分に出ていない場合は、もう一度マグアンプやプロミックオキサミドを置きます。)

【置肥の選び方】

- <①> 側芽の数が確保されていて芽の動きがある場合 → プロミック遅効きタイプ8-8-8
 <②> 側芽の数がまだ少ないが芽の動きはある場合 → プロミック遅効きタイプ6-9-9

【管理のポイント】

夜温が落ち着き、シクラメンの生育が旺盛になる頃から肥料のベースは置肥にシフトします。(液肥は補助的な役割)

肥料の要求量増に、急に液肥の濃度を上げて対応すると養分レベルに山谷が出来てしまい芯止まりの原因になります。肥料の供給は安定した肥効の置肥を中心とし、液肥は芽を動かすためのサプリメントに位置付けて管理していきましょう。

リング掛けのポイント！

残暑が厳しい時期に株の中心部をしっかりと開く葉組みを行うとストレスがかかり生育が止まってしまう。無理に葉柄を曲げこまず、軽く中心を広げる程度にしましょう。1週間以内に1巡し、かけ直す回数を増やすことで秀品率が向上します。8月までの生育が旺盛で、株の中心が葉で覆われている場合や秋葉の動きが停滞している場合は、少し早めに株の中心に光を当てて新葉の展開を促すと良いでしょう。

花芽を覗いて生育チェック！

- 基部は太い？ 細い？
- 反転の強さは？

基部が細く立ち気味の花芽なら養分不足の可能性があります。

反転

太い

秋葉が動き出す頃に、株の状態を確認し夏場の肥料や水遣りの結果を確認しましょう。

- 芯止まり状態 = 夏場の肥料不足
芽の中心が固まり新しい芽が展開していない場合、肥料が不足したことで主芽優勢になっていると考えられます。
- とさか芽芽 = 肥料過多(または養分レベルが変動)
歯ブラシのような芽の発育異常が見られる場合、肥料が多すぎて新芽の動きが停滞している可能性があります。

出荷前の管理

【管理のポイント】

仕上げ期は、チッソをしっかり供給し『太い花径』・『厚みのある花卉』・『葉色のコントラスト』を確保しましょう。

ジベレリン処理のタイミングは出荷ピークから逆算し45～50日前です。10月の時点で花芽の数が充実していれば自然開花に任せても良いでしょう。加温の開始は外気温が10℃を下回る頃です。暖房機の点検は早めに済ませておきましょう。

<温度設定の目安>

- 15℃～18度
→ 蕾の発達、葉枚数の増加
- 20℃前後
→ 開花促進

開花促進にお勧め！シーウェックス(N-P-K=1.2-0-6.0)

海藻類と微細藻類由来の有効成分をバランス良く配合したBS資材です。植物体内のホルモンバランスを整え開花プロセスをスムーズにします。葉面散布：2,000倍～3,000倍(7日間隔)



【DIFの活用】

DIF(日中と夜温の格差値)を利用して草姿を引き締めます。加温が遅れると“葉柄の伸び”や“花芽の遅れ”が生じるので注意します。最低夜温が15℃位から加温を開始し、プラスDIF値を少なくすると開花が揃いやすくなります。また本格的に加温を開始した後は、早朝(日の出)から数時間ハウスを開放し低温の外気をハウスに入れマイナスDIF環境を作ると良いでしょう。